

日本クリニカルパス学会・医学書院クリニカルパス教育セミナー開催

クリニカルパスとチームで 患者中心の医療を!

パスを利用することでできる患者中心の医療とは何か。2006年7月8日、いま医療現場で注目を集める感染対策、NST(栄養サポートチーム)、地域連携の分野で、チーム医療を牽引しているエキスパートを講師に迎え、日本クリニカルパス学会・医学書院主催のクリニカルパス教育セミナー「現場で活かせる! クリニカルパス——チームで取り組む患者中心の医療」が東京・ヤクルトホールで開催された(同プログラムのセミナーを7月22日大阪WTCホールにて開催)。

始めに、「感染対策とクリニカルパス——チーム医療で手術部位感染を撲滅しよう」と題し、NTT東日本関東病院副院長・外科部長の小西敏郎氏が演壇に立った。同院内でのパスと感染対策におけるパスの有用性について、具体例としてSSI(手術部位感染)発生率の極めて高い食道癌手術のパスを紹介し、「パスがあれば、チーム医療に関わる誰でも、早い段階で感染の危険性というバリエーションが発見できる」と語った。

次に、「記録とクリニカルパス——情報の共有と経過記録のデータベース化」では、済生会熊本病院TQMセンター・パス専任看護師である堀田春美氏が、アウトカム志向クリニカルパスの構造や、それを基礎として作成された日めくり記録の実際、パス内で発生したバリエーションの分析の実際について解説。また効率的にパスを作成するための課題となっているアウトカム用語の統一について問題点を整理した。



さらに、「NSTとクリニカルパス——NSTとクリニカルパスからチーム医療をいかに発展させるか」をテーマに、前橋赤十字病院副院長の池谷俊郎氏は、NSTの概念や活動の実際を示しながらパスによって可能なチーム医療における知識の共有が医療の質向上にどのように影響するかを解説、PEG(胃ろうによる栄養療法)パスの改良を通して得られた効果について言及した(大阪での講師は若草第一病院外科部長の山内英治氏)。

そして「地域連携とクリニカルパス——診療の目標やプロセスを共有し、より効果的効率的な医療を提供しよう」と題し、北美原クリニック理事長・函館五稜郭病院客員診療部長の岡田晋吾氏が、「患者中心の連携」にいかに関係が有用かを述べたうえで、同診療所の癌診療に関する連携パスの実際を示しながら、パスの効果と今後の課題を浮き彫りにし、診療所・病院双方に求められる連携のネットワークづくりが肝要であることを示した。

チーム医療におけるパスの有用性ととともに講師らが語った、チーム活動の強化、より洗練されたパスの作成などの、医療の質向上へ向けたさらなる取り組みへの熱い思いは、最後に行なわれた総合討論での活発な質疑応答を通して、参加者と共有されたのではないだろうか。 ●本誌編集室